

ポルトガルの宰相ポンバル侯とブラジル

住 田 育 法

I はしがき

ポンバル侯研究の第一歩として以前に「ポルトガルの宰相ポンバル侯とその時代」⁽¹⁾を公表したが、本報告はこれを土台として上記表題にて行なったものの要旨である。

ポンバル侯（1759年、Conde de Oeiras, 1769年、Marquês de Pombalに叙される）の名で知られる Sebastião José de Carvalho e Melo（1782年没）⁽²⁾は、1750年から1777年に至る国王ジョゼ1世の統治時代に、国王を押し立てて絶対主義的、重商主義的理念に基づく数々の改革を断行し、その権勢が絶大であったため、この期間は一般に「ポンバル時代（O Tempo de Pombal）」と呼ばれている。当時最大の植民地ブラジルに対しては、1763年にブラジル管区（Estado）の首都をバイア（今日のサルヴァドル）から南部のリオ・デ・ジャネイロに移し、1772年にはマラニオン管区をブラジル管区に編入させ、近代ブラジル領土の大枠を完成させた。また、特許会社設立による重商主義政策の強化、ドナタリオ制廃止による土地制度の改革、イエズス会会員の全ポルトガル領内追放による宗教および教育制度の改革などを行ない、商業主義の徹底と王政下での植民地の統一を目指した。

ところで、ポンバル侯の対ブラジル政策を考察するにあたって、彼自身一度もブラジルの地を訪れたことがなかったことに注目する必要がある。ポンバル侯は数多くの文書や記録を残しているが、ブラジルに関する情報はすべて支持者を通して入手されたものであったため、量に比して対ブラジル政策を明確に裏付ける資料が僅少であるからである。実際、膨大な資料の多くが未だ手付かずのままなのは、ポンバル侯の政策の理念と現実との間に因果関係を認め難いからなのかもしれない。ちなみに、ブラジルの地にあってポンバル侯の理念を具現化した支持者は、北部のマラニオン管区では、総督 Francisco Xavier

de Mendonça Furtado, 南部のリオ, ミナス, サン・パウロ管区では総督
Gomes Freire de Andrade — Conde de Bobadela, 1769年以降はブラジ
ル管区副王 D. Luís de Almeida Portugal Soares de Alarcão D'Êça e Melo
Silva Mascarenhas — Marques do Lavradio などであった。

註

- (1) 『COSMICA』(京都外国語大学)X号, 昭和56年3月, 56
— 83 ページ。彼の理念的背景については59—63 ページを参照されたい。
- (2) 今年はポンバル侯没後200年にあたっており, ポルトガルでは記念
の行事や出版が企画されている。

Ⅱ ポンバル侯の諸改革

植民地ブラジルに対してなされた改革を3つの項目に分けて説明したい。

1. 重商主義政策

1755年にグラン・パラ・イ・マラニョン特許会社, 1759年にペルナン
ブコ・イ・バライーパ特許会社を設立し, 遠隔地貿易による利潤の獲得並び
にブラジルの北部, 北東部の開発を企図した。ユダヤ人とアラブ人に代表され
る商人階級の活動を擁護し, 1768年には新旧キリスト教徒の法律的, 社会的
差別禁止法を發布した。特許を与えた独占商品は, 輸入では黒人奴隷, 輸出
では米, 綿花, タバコ, なめし皮, カカオなどであった。

2. 土地制度の改革

ドナタリオ制(世襲カピタニア制)を廃止し, いわゆる領主「ドナタリオ」
の自治権を否定して王権の侵入を計った。もっとも, ドナタリオ制は, 植民地
時代の16, 17世紀を通じて表面上は消滅状態にあって, 18世紀にその権
利を王室に復帰させる時点でようやく現実問題として歴史に登場したと言われ
る。⁽³⁾ 廃止に至る歴史的背景には領地の自給自足体制の行き詰まりと商人階
級の台頭が考えられる。

3. 宗教および教育制度の改革

宗教のみならず政治や経済にひじょうな勢力を誇っていたイエズス会会員を
1759年に植民地を含む全ポルトガル領内から追放し, 絶対王制の確立と重

商主義政策の強化を計った。イエズス会に属するすべての教会や施設、学校が閉鎖され、その財産が没収された。追放に伴ない数々の教育改革が実施され、ブラジルでは、ラテン語とインディオ共通語に代ってポルトガル語による教育が行なわれるに至り、これ以後、ポルトガル・ブラジルの民族意識の形成が進められることとなった。

註

- (3) Caio Prado Jr., The Colonial Background of Modern Brazil, Univ. of California Press, 1967. p.498, n. 31.

■ 結び

ポンバル侯の諸改革についての評価は、ポルトガルではイエズス会会員追放の是非、といった観点から論じられる傾向が強い。しかしブラジルでは、ポンバル侯の商業主義理念が各地域間の経済交流を活発化させ、行政機構の改革と相俟って将来のブラジル統一を助けたとの立場から、概して高い評価が与えられている。報告者もこの意見に同調するものであり、特に南部を中心とした新しい発展の拠点としてリオ・デ・ジャネイロを新首都に選定しこれを近代都市に向けて整備した点を重視したい。いささか誇張した表現ではあるが、ポンバル侯の理念はいわば新ポンバル主義として、例えばリオ・ブランコ男爵の外交理念、大統領ヴァルガスのブラジリダーデ理念において引き継がれていると言って良いであろう。